

CL寓話

みんなに好かれたかった女の子 / *Runaway*

David K.Reynolds 著 本多岩夫訳

“Water Bears No Scars” - *Runaway* - p146

むかし、ジョーゼットという名の幼い女の子がいた。彼女には、学校で先生が出す質問の答えが全部わかっていて、自分は素敵な女の子になりたいと、あらゆる努力をした。誰からも好かれたかった。

ジョーゼットはクラスの何人かの子供たちが、自分のことを少しも好きでないことを知って驚き傷ついた。そして、兄が家出したときには、それよりももっと驚き傷ついた。

「私はみんなのために、活発で、親切で、良い子になるよう一生懸命やっているわ」と彼女は思った。

「何人かの人には、私が愛されようと一生懸命やっていることを理解しているわ。先生方は判っておられるようだ。でも、級友の中には私の努力を認めず、私を好きになってくれない人がいるのは、どうしてかしら？ 大好きな兄が、私から逃げていったのは何故かしら？ 多分私に、どこかいけないところがあるんだわ。多分私には、人を恐れさせ、逃げ出させるような何かがあるんだわ」

そこでジョーゼットは、学校で「特別魅力クラス」と「困難コース」を選択し、更に自分に磨きをかけようとした。一つの特設クラスでは、子供はあるがままで良いのです、と先生は言い続けた。ジョーゼットには、隣の席で汚れた顔で鼻を垂らしたいたずらっ子が、あるがままでいいのだということがどうしても分からなかった。彼がなぜ美しいとついに理解したときに、自分もまた美しいのだと分かった。自分を好きではない子がいても、自分のそばから逃げて行こうとも……。それに逃げ去った者もまた、あるがままでいいのである。

この話は、「建設的な生き方」の指導資格を得る訓練を受けていたある医者のために書いたものである。大抵の人と同じように、彼女は目標達成のために、かつ感じのよい人になるために、一生懸命勉強した。しかし、時には拒否され、傷つけられ、自己不信を抱くこともあった。

これは受容について一人をあるがままに受け入れ、自分自身をあるがままに受け入れることについて一の話である。受容は自己不信を消し去りはしないかもしれないが、自己不信もまた受け入れるようになる。

